

黄昏雑歌

島田修三

芥川龍之介の「秋」は、主人公の信子が〈秋——〉と心の中でつぶやくモノ哀しい場面で終わるのだが、ぼくはこの場面がどうも気恥ずかしくってならない。芥川はステイボーイのくせに含羞がちよつと足りないんじゃないか、と思ったりする。

あ、秋とひとり呟くうつろさは尿のまにまに蟋蟀をぞ聴く

ビリーバンパンの弟、菅原進が歌う「プールサイド」という曲はサイコーである。ついでにいうと、ぼくは初秋のプールが好きだ。水泳部員たちが鳥肌立てて引き上げて行った後の、アメンボが小さな波紋を立てている夕暮れの水面をプールサイドからぼんやり眺めているのはホントにいい。

水のやうに夕べこぼれていく心プールサイドはだあれもゐない

長男文也が二歳たらずで死んでしまった直後の中也の詩は、もうどうにもつらい。作品と詩人の境涯との関係があんな風であるなら、詩を書きつづけるといふのはソートー強靱な精神がいるわけだ。ぼくは子供が死んだとか聞くだけでメゲテしまう。

二人子を遊ばす水際ゆふぐれの海にゐるのはあれは浪ばかり

二十歳のときに父に死なれた。世間知らずの母、結婚問題でもめている姉、多感で反抗的な弟、そういう肉親の一切を引き受けなければならぬ、とほくは思いつめていた。父の残した僅かな財産の運用とか、親戚とのトラブルの謝罪とか、ウンザリするような日々が続いた。死んだらどんなに楽だろう、と一日に一回は考えていた。

死を歌へば世界しづかによみがへる永劫回帰のかの夕べはや

篠田統の『中国食物史』を読むと、中国における美食としての食人のスサマジイ歴史に呆れてしまう。孔子の愛した子路は塩辛にされたし、巨大な石臼でひかれてミンチボールにされたのもいれば、赤ん坊を喰いまくった盗賊もいる。それに比べれば、日本人の美食なんて他愛ないものだ。

生き急ぐ理由はもはら俺になくみだらなまでに寒鯨うまし

文学的にモノを考えるとというのは、ほくの場合は、かなりミジメな位置から発想して行って、決して解答を出さない、価値判断をしない、というようなことになる。夜更けとともに、こういう状態に自分を追いこみながら、悶々と苦しんだりしている。

文学の識域超えゆくひとつこと夕べにれかみ螺旋階のぼる

古代では、たそがれの時刻を逢魔が時といった。他界からヘンなものが入界界に出没して来る時刻ということで、この時間以後は魔モノどもに戸外の空間をすべて譲り渡したのだ。たそがれはそういう境界の時間帯であって、それゆえ何か起こりそうなスリリングな静寂を湛えているのだ。

黄昏^{くわんこん}をひくく飛びゆく鳥あれば静かな記号と見てゐる心ぞ

団地にはおびただしい子供たちがいて、日曜なんかコンクリートの谷間に一日中、かれらのもろ声が響いている。声が森がそこに鬱蒼と茂っているみたいなき感じのすることがある。だから深夜になると、団地の庭はほんとうに淋しいものになってしまう。

死児たちの魂魄はにかみイつやうな月明したたる砂場であつた

高校時代、近所の教会に通っていたことがある。キリストは人類の罪を自らの死によって贖ったなんていうけれど、子供には罪なんかじゃないか、とかカラマゾフのイヴァンみたいに牧師にからんではかりいた。笑顔の優しい牧師だったっけ。

纏れゆく俺が重たい夜半^{よは}である消えたかりけむキルケゴールも

冬の雨というのは実にイヤなものだ。ところが、戦中派世代の詩人とか歌人には妙に〈時雨〉を偏愛している人が多いように思う。近藤芳美なんかはその典型じゃないか。時代とフィットする天候気象というものが確かにあるんだと思う。

かきくらし時雨るる午後を出講す泥まみれなり靴もこころも

八木重吉の愛娘、桃子クンはお月さまのことを〈おちいたば〉、金魚のことを〈ちんとん〉などと言っては、もうじき死ぬ運命にある若い父親の心にかすかな灯をともし続けた。よく晴れた日には〈桃ちゃんいい子　いい子うよ〉なんて歌って、父親に切ないほど澄명한詩を書かせた。

小春ビヨレ小春ビヨレと子が騒ぎなるほどそんな秋の日である

小学校四年生のときに、水原弘の「黒い花びら」が大ヒットした。水原弘は目つきの険しい、見るからに不良少年という感じの歌手だった。〈あの人は帰らぬ遠い夢よ〉なんて失恋の歌詞だったが、子供にもそこはかたない悲哀が伝わるのだった。

ポスターの中なる死者が殺虫剤かかけてあはれオゴソカに笑む

ぼくは幽霊を確実に一回、それらしきものを数回見ている。どれも陰々滅々として淋しくイヤな後味をぼくに残している。これの世には浮かべられない魂というものが満ち満ちているということも、ぼくの年齢になると切ないほど実感されるのである。

蒼々と死者も生者もたそがれてわいだめもなき時刻と思ふ

ほかの友人たちの間では、ここ数年、ステイーブン・キングの静かなブームが続いている。キングがニューホラーの旗手だとかいわれているのは単なるレッテルに過ぎない。キングの豊かな細部に満ち、したたるようリリカルな小説を読んでいると、たいがい夜が明けていたりする。

S・キング読みゆく時間の薫りかな生きて在ることなかなかによし

Yという友人がいる。生活感あふれる短歌とスルドイ評論を書く男で、最近、歌壇的に注目されはじめた。ほかはこのYに作歌の上ですつとオタテられたり、ハゲマされたりして来た。Yに、もつと抒情に徹しなければいけない、逃げるな、と言われたことがある。身にしみてるんだぜ、Y。

アハモリの酔ひのきはみに暮れ果てて群青したたるころの夜空

『帝国主義論』の序文に、自分は万力で締め上げられるような状況の中で言葉を紡いで来た、という意味のことをレーニンに記している。現代日本にもそんな状況が実は確かにあるのだ。顔のないハンブレイ・ダンブレイの姿が君には見えないのか。

三十で禿げあがりたるレーニンの憂鬱想ひやうやく気が晴る

伊丹十三が昔のエッセーで、日本の俳優はキザな金持ちの役をやらせると全然サマにならないが、貧農上がりの下士官とか兵士の役ならうまくこなす、ということを書いている。要するに貧乏つたらしさがわれわれには身に染みついてるわけだ。ほかは貧乏で何が悪いんだ、とも思っている。

理由なし今すぐ行きたし黄昏のアンダルシアの貧しき街区へ

へさよならだ。永かったつきあいも、これでさよならだ。僕はいちばん古い友達をなくした」という一節で阿部昭の「大いなる日」は始まる。へいちばん古い友達」とは父親のことだ。父と息子の関係は、煎じつめると、確かに旧友同士なのだ。

来世紀とある夕べを父われと等しき愁ひに子は堪へるだろう

女の肘は関節を曲げたままの状態でいると、男のそれより遙かに持久力を発揮するらしい。これは子供を抱くのに適したものであつて、育児能力に関して、女の方が男より身体的に優れた点の一つだろう。それはともかく、さつきから、末娘がぼくの耳もとで、ダッコ、ダッコと騒いでいる。

何不足なき魂もあるやうな気がしてマミ君タカイタカイしよう

十五歳まで東京の池上に住んでいた。池上は日蓮宗大本山、本門寺の門前町でゴミゴミとした商店街を中心に広がっていた。小学校の級友Kの家は池上駅の近くの果物屋で、店の裏側の物干し場の上つてよく遊んだ。いつも果物の熟れた匂いがかすかに漂つていて、何だかKが羨ましかった。

西陽さす物干し場とかさういつた場所でじみじみ黙つてゐたい

〈肉親ていうだろう、あれは肉体の親なんだ〉とか〈この虚無感を今日もお地藏様にお供えしよう〉とか〈セメダインと千代の富士の腰が嫌いだったね〉なんていう野田秀樹のズッコケ科白の数々——ときどき思い出してはひとりであつて笑っている。

還らざるわが人生のとある午後チキンラーメン悶々とすすす

レイモンド・チャンドラーはものすごいマザコンだったそうだ。夫人のシシーは十七歳年上だったから、ほとんど母親みたいなものである。そういうひ弱なコマッタ奴が、あの永遠のタフ・ガイを創造したわけだ。ま、カッコよすぎるのも仕方ないか。

タフに生きしかも優しくある一生あひじょうの探偵マロウはムシがよすぎら

誰の作だったか、〈わびごとや神無月とはなりにける涙のごとく降る時雨かな〉という歌がある。はなはだ景気の上がらぬ歌だが、時々ひよいと口をついて出てくる。佐藤佐太郎の〈降り出でてやうやく繁き寒の雨なみだのごとく過去は充ち来る〉というのも一緒

に出てくる。これはやや甘いか。

炭酸の泡のやうなる時間かな霜月まるごとわが死んでゐる

君の歌には死とか死人とかがやたらと出てくるネ、と友人のNが笑いながら言うのだった。そう言われて見ると、なるほど出てくる。どうして？ とNに尋ねられたけれども、自分でもわからない。妻が横から、趣味なんですよ、なんて口をはさんだけれど、そんな趣味があるかよ。

極辛のカレーに舌を灼きながら凜としづまる死者をこそ思へ

カナダ西海岸の大学のドミトリーに一月余り暮らしたことがある。そこでヴェトナム人のニュエン君という学生と親しくなった。彼はいわゆるポート・ビープルで一家は離散していた。再び祖国の土を踏むために、国際赤十字の医療技師になると言っていたが、どうなったか。連絡はない。

グラビアのなかなるヴェトナム少女にて織妍清楚したたるばかり

窪田空穂に〈何をさは苦しみてわれのありけるぞ立ちて歩めば事なきものを〉という歌がある。三十七歳のときの作である。ほくは、この歌を読むたびに、ホントにそうだと思う。こうやって空穂は生活を幾度となく渡り切ったのである。

僅差にて敗れつづけむ打ち合へばとめどもなけれ生活のジヤブ

〈水風呂にみずみちたればとつぶりとくれてうたえるただ麦畑〉へフランシーヌのようにひとりであるけれどさらにひとりになりたくて、なつこといった村木道彦の歌々が時にたまらなく懐かしくなる。あの瑞々しく淋しいリリックは二十年たっても、ほとくの中ではちっとも古びない。

踊り場にパセリひと束落ちてゐて影つややかなまひるまである

十五歳のとき横浜に移り住んだ。横浜唯一の自然海岸が残った静かな町だったが、数年後に埋め立てられた。元の海岸のあたりまで運河を引いて潮だまりが作られ、市民の憩いの公園とかなったが、たちまちそこいら一帯にドブの臭いが漂い始めた。

潮ひけばへドロに蒼くひかる杵ほらほらあれがぼくらの骨だ

商品がターツと天上まで連なっていて、その彼方から福音が聞こえてくる、と赤瀬川原平や渡辺和博は現在の大量消費社会のシステムとぼくたちとの関係を説明している。いまやぼくたちは、カネとモノとで積み上げた神殿に生命をカントンに捧げたりするナサケナイ信徒に落ちふれたのだ。

果て知れぬあつぱあみどるの幸福は街にあふるるマークIIを見よ

ぼくはとにかくココロザシ高く生キタイとか思っている。ぼくにとってココロザシ高く生キルとは、含羞を忘れたくないということとほぼ同義だ。含羞さえあれば、もの欲しげな顔をしたり、アホウな強者に阿諛追従したり、夜郎自大にダラクしたりしないでも生きていけるからネ。

憑きものの落ちゆく寒き歳月にわが江藤淳くやしくも墮つ

特長のある足音というのがある。ぼくなんかは多分そうだ。せつかちなドタドタ調で歩くから、階段のかなり下の方にいても五階の家族には、あ、お父さんが帰って来たと知れる。死んだ父にも特長があつて、息子とは正反対に、実にゆったりとした、地面を踏みしめるような足音だった。

階段を降りゆく靴音聴きみししが雨霧ふかき夜の底に消ゆ

学生時代、チャールズ・ラムの「エリア随筆」を愛読したが、「夢の子供たち」に流れる、気の遠くなるように澄み切った悲哀感は今でも忘れがたい。いま目の前で、妻に甘えて笑い転げているぼくの子供たちも、ほんとうはリースイの岸辺にたたずむ幼い者の影なのかも知れない……。

二人子を左右に抱きよせこんこんと女ざかりのイザナミ眠る

第二次大戦中の日本の軍用艦船は高い技術レベルにあったが、特に巡洋艦はスクレモノが多かった。ぼくは愛宕型の重巡洋艦が少年のころ好きだった。前面のほぼ垂直にきり立つブリッジが城のようで、独特の美しいシルエットを作りだしていた。

夢にして重巡アタゴの艦影の視野よぎりしがのちは混沌

ぼくは明窓浄机という言葉が好きだ。実際のぼくの机の周辺はおよそ明窓浄机とはほど遠いのだが、せいぜいそのイメージに近づける努力はしている。俗流心理学によると、身辺のモノを整理整頓したがるヤツというのは心が千々に乱れてるんだそうだが、わりと当たっている。

一日を机辺にあればひつそりと肩に寄りそひ優しい退屈

月下独酌なんていうのはサイコーだが、心の通い合う友人と差して飲むのもいい。(彼一語われ一語秋深みかも)(虚子)という感じでヤルのが理想だが、現実には二人で喋りまくるといことになる。そこに流れていた豊かな時間の余韻を糧にして、彼は彼の、ぼくはぼくの日常に帰る。

俺と来て遊べや思ひ出酔ひはててこころの廢墟に月も上れり

権力対民衆、国家対人間、組織対個人といった二項対立的な状況が潮の引くように効力を失って行ったのが、一九七〇年代だったと思う。八〇年代は、その形骸さえ風化しようとしている。民衆は消えた。㊦と㊧の孤独な消費大衆がアミーバのようなアサマシイ姿をさらしているだけだ。

群棲をなさざる孤独な集団に鮭の一生は終るとこそ知れ

葛西善蔵の「哀しき父」とか「子をつれて」に登場するミジメったらしい父親は、憐憫なんかを通り越してほとんど笑ってしまう

のだが（デ・シーカの「自転車泥棒」の父親の方が遙かに泣けるし、エライ）、はく自身が「哀しき父」ではないという保証はどこにもないのである。

〈風が立つ生きねばならぬ〉影をひき惹さげ子をつれ父は歩むも

俳句のブッキラボーが羨ましい。愛誦する（詩よりほかにもたらさぬ夫に夜の餅）などというニクイ句も短歌で同じ所を狙うとま
ず弛んでしまう。そこで、ヘマツクロコゲを喰はせつ愉快、というような下二句をこれに付けて、ズッコケさせる。そうやって、や
つと夫婦がほくの歌になる。

わたくしをなめないことネとスゴミたる後ややありて噴き出すガハハハ

横浜にKという友人がいる。昔、二人で京橋フィルム・センターとか文芸座に通った。名画の続編を二人で作ってしまう遊びにも
熱中した。シェーンがスターレット家にアル中になって戻って来るとかいうのを考えたりした。ほくたちは若すぎて、チェホフ的結
末に堪えられなかったのだ。

はてふとも韃韃海峡越えゆきしかのてふてふのその後が気になる

路地の石塀に（死後さばきにあう）なんぞとオソロシイ札がよく貼つてある。さもあらばあれとほくは思うが、ほんとうにほくた
ちは自分の命以上の超越的価値というものを信じていないのだ。つまらぬモノばかりを信じてやまない。（謙抑にして神意を待てよ）
と晩年の中也是言つてたっけ。

なだれきて団地をおほふ夕あかね恩寵のごとく窓々かがよふ